
サドで邪悪な召喚獣 i f ~ Berserker Princess ~

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サドで邪悪な召喚獣if\ Berserker Prince
s\

【Nコード】

N2751Y

【作者名】

まあ

【あらすじ】

サドで邪悪な召喚獣ifシリーズ。第4弾です。今回のヒロインはまさかの『清水美春』です。人外父娘対いかれた科学者『前田理音』の対決はどうなるんでしょうか？

個人サイト『悠久に舞う桜』でも連載しています。

予習問題

『マイエンジェル、ドウシテオトウサンカラニゲルンダイ』

「こないで変態!!」

幼い日の記憶、かなり外れた父親を持つ少女『清水美春』は背後に真つ黒なものをまとった父親から逃げるように近所の公園を逃げ惑っている、

「リオ、どうしよう。変態がいるよ!？」

「変態？ あれが噂に聞くロリコンか？」

自分達から距離を取って行く人々のなかに同年代の少し頭が足りなさそうな少年と一見、少女に見えるような少年の姿が目の前に立っている。

「ど、どけて!!」

『ミハル、オトウサンガ!!』

美春は目の前に現れた少年2人にどけるように叫ぶが少女の足ではいつまでも大人の足から逃げきれぬわけもなく、父親が美春に向かい飛びかかるうとした時、

「リオ、な、何をする気!？」

「決まってるだろ。変態や犯罪者は血祭りにあげる。社会が見逃す

んだ。俺がぶちのめしても問題ないだろ」

美春の目の前の少年のうちの1人は口元を緩めせると懐から花火を取り出し、美春に飛びかかるうとした父親を撃ち抜いて行く。

「な、何なのですか!？」

「リ、リオ、やりすぎ!？」

「おい。呆けてないで逃げろ。その程度では止まらないみたいだぞ」

美春は何が起きたかわからないようで目を白黒させるが花火を放った少年は美春の父親に止めを刺すに至らなかったと舌打ちをして美春に逃げるように言い、

「は、はいです」

『ワタシトマイエンジェルノジャマヲスルノハドコノブタヤロウダ?』

美春は少年の言葉に頷き、駆け出すと彼女の父親は自分に攻撃を仕掛けた少年を敵とみなしたようであり、背後にまもっていた真つ黒なものを殺意に変えて少年に襲い掛かるように駆け出す。

「ちょ、ちょっと、リオ、どうするの!？」

「アキ、下がっている。確かに人を威圧するものはあるが攻撃の動きとしては単調であり、当たる事はない」

少年は美春の父親の殺意に負ける気はないようで小さく口元を緩ま

せるともう1人の少年に下げると父親の攻撃を交わしながら花火で父親を撃ち抜いて行き、

「す、凄いです。が、頑張ってください。その変態を打倒してください！！」

『キサマハマイエンジェルニイロメヲツカウブタヤロウカ？ コロス コロス コロス コロス コロス』

美春は自分の事を助けるために身体を張っている少年の姿に彼女の小さな胸は小さく1度跳ね上がり、声を張り上げて自分のために戦う少年を応援するがその言葉は父親にとって少年に向けた殺意を引き上げる事にしかならず、

「リオ、逃げるよ！！」

「アキ、何を言ってる？ 犯罪者を前に俺が逃げるわけに行くか。ぶち殺してやる」

少年は不利な状況ではあるが口元を小さく緩ませたまま、懐から今度は毒々しい色の液体の入った注射器を数本取りだし、

「……大振りの攻撃だな。頭に血が昇りすぎるとこんなものか」

美春の父親の大振りの攻撃を少年は交わすと少年の持つ注射器の毒々しい色をした液体は美春の父親の身体に吸い込まれて行き、

『グガガガッガ！？』

美春の父親は壊れた玩具のように前のめりに倒れ込み、

「リオ、無事？」

「ああ。それより、アキ、逃げるぞ。面倒な事になりそうだ」

「うん」

後ろに下がっていた少年は激戦を終えた少年に声をかけるが大人が少年相手に殺意を向けていた事に誰かが警察を呼んだようで警察官2人が少年2人に駆け寄ってくる姿が見え、少年2人は逃げるように駆け出して行き、

「リオお姉さま？」

美春は命の恩人？に淡い恋心を抱いたようで頬を赤らめ、逃げる少年達の背中を見送るが少年を少女と勘違いしているようである。

第1問

「明久、この後、どうするんだ？」

「そうだね。ボクの家でゲームでもする？」

『吉井明久』は授業が終わり、同じクラスの友人である『坂本雄二』、『木下秀吉』、『土屋康太』の3人と放課後の予定を話し始めた時、

「よ、吉井くん、いますか？」

「あれ？ 姫路さん？」

同じ小学校出身ではあるが付き合いが薄くなってきた少女『姫路瑞希』が息を切らして教室に入ってきて明久の名前を呼ぶ。

「よ、吉井くん、大変なんです」

「ど、どうしたの？ 大変って何があつたの？」

「あ、あの。前田くんのお母さんが事故に遭ったって、私のお母さんから連絡があつて」

「前田くんのお母さん？ え？ 姫路さん、いきなり、そんな笑えない冗談を言わないでよ」

「冗談なんかじゃありません！！」

瑞希は瞳に涙を浮かべながら、明久の幼なじみの『前田理音』の母親である『前田怜奈』が事故に遭ったと話すが明久はいきなり聞かされた話しに頭が処理できないようであるが瑞希は真実のみを述べているようで彼女の瞳からは大粒の涙が零れ落ちている

「明久、落ち着くのじゃ。姫路の様子を見ると冗談では無さそうなのじゃ」

「う、うん。そ、それで姫路さん、おばさんは大丈夫なの？ そ、それに怜生くんは？」

「そ、それが今は病院に運ばれて手術中だってお母さんから電話があつて、前田くんに連絡を取りたいんだけど、おばさんの携帯電話は壊れてしまったみたいでどこに連絡したら良いかわからないって、それで、吉井くんなら、わかるんじゃないかって、怜生くんは私のお母さんと一緒に病院にいます」

秀吉は明久に落ち着くように言うと言明久はまだ現実が理解できていないようであり、声を震わせながら瑞希に聞き返すと瑞希は怜奈が手術中だと言う事と理音の弟の『前田怜生』が病院にいる事を話すと明久に理音の連絡先を知らないかと聞く。

「り、リオの連絡先だね。わ、わかったよ。い、家にあるから、直ぐに帰って電話するよ。あ、あのさ。雄二、秀吉、ムッツリーニ」

「良いから行け」

「……………気にするな」

「う、うん。ごめん」

「よ、吉井くん、私も行きます」

明久は顔を真っ青にしながらも友人3人に謝るとカバンを手に取り、急いで教室を駆け出して行き、瑞希も明久の後を追いかけて行き、

「ちょ、ちよっと、吉井、危ないわよ!!」

「お姉さまにぶつかるなんて、どう言っ了見ですか!!」

明久は廊下に出た所でクラスメートのドイツからの帰国子女の少女『島田美波』とドリル型の特徴的なツインテールの髪形をした少女『清水美春』にぶつかりそうになるが、

「ゴメン。島田さん、ちよっと、かなり急いでるんだ」

「そ、そうなの？」

明久は今は美波に付き合っている暇もないため、直ぐに駆け出そうとし、美波はあまり見る事のない明久の真面目な表情に少しだけ照れたように視線を逸らした時、

「よ、吉井くん、待ってください。私も行きます」

「ひ、姫路さん？　ちよっと、大丈夫!？」

息も絶え絶えになった瑞希が明久に追いつき、明久は瑞希に駆け寄り、

「へえ、ウチには急いでるって言うわりにはその子には優しくする

んだ？」

「ちょ、ちょっと、島田さん、落ち着いてよ。今は本当にそんな事をしてる暇はないんだよ」

美波は明久の態度が気に入らないようであり、明久の肩をつかむと明久は今から自分に起きるであろう惨劇に顔を引きつらせるが、

「す、すいません。本当に時間がないんです。吉井くん、は、早くしないとおばさんが」

「そ、そうなの？」

「う、うん。ごめん。島田さん、本当にボク達は時間がないんだ。詳しい話は雄二達に聞いて。姫路さん、行こう」

「は、はい」

瑞希が明久と美波の間に割って入ると美波は2人の様子にただ事ではない事が起きた事は理解出来たようであり、2人は美波から解放されると明久の家に急ぐ。

第2問

(……3年ぶりか？　あまり、変わってはいないな)

『前田理音』は幼なじみの明久の母親が事故に遭ったと聞かされた時、戻るつもりなどなかったが彼が所属している研究所の恩師に母親の様子を見て来いと研究所を追い出され、生まれ育った街に3年ぶりに足を踏み入れるが、

(……今更、俺があっても仕方ないだろ。あいつが死のうが俺には関係ない事だ。とりあえずはアキと瑞希に会えばあのじじいも納得するだろ)

理音は自分を捨てた母親になどすでに情の一欠けらもないため、1度、病室に顔を出して研究所に戻るつもりであり、明久と瑞希から聞いた母親が入院している病院に向かおうとした時、

「ミツケタ。マイエンジェル。イエデナンカシナイデオトウサンノムネニカエツテオイデ」

「絶対にイヤですわ！！　近づかないでください。この変態！！」

道路の真ん中をドリルのような特徴的なツインテールの少女を背後におかしな気配をまとった中年男性が追いかけて回しており、

「……おかしい人間が出るのは春だけじゃないんだな。ん？　何か、こんな光景もみた事がある気がするな」

理音は2人の周りに道が開く様子に小さく首を傾げる。

「邪魔ですわ！！ どけなさい。豚野郎！！」

「ん？」

理音は一先ず、自分には関係ないと思ったように先に進もうとした時に少女は理音に向かって駆け出して来ているだけではなく、理音が邪魔だと罵倒しているが、

「ミハル、ソノオトコハナンダ？ キサマ、マイエンジェルニナニヲスルツモリダ？」

「……意味がわからん」

なぜか、中年男性は理音へ殺意を向けると同時に理音にナイフを投げつけ、理音は表情を変える事なくナイフを弾き落とし、

「おい。あいつはなんだ？」

「放しなさい！！ 豚野郎、美春はあの変態に捕まるわけにはいかないのですわ！！」

理音に殺意が移った事で理音を餌にして逃げようとする少女の特徴的に髪を理音はつかむが少女は必至なように理音のすぐ横で彼を罵倒するが、

「知るか。だいたい、あれはお前の関係者だろ。人を巻き込むな」

「知りませんわ。豚野郎の問題であって美春には関係ありませんわ！！」

理音は美春と名乗る少女に中年をどうにかしろと言うが美春は完全に自分のせいではないと言い切り、

「…………… コロス コロス コロス コロス コロス コロス」

そんな2人の様子は中年男性には理音と美春が仲良くしているようにしか映っていないようであり、彼のまもっている殺意はさらに色濃くなっている。

「ん？ やはり、この感覚はどこかで味わったような気がするんだが、まあ、良いか。俺に敵意を向けたんだ。それなりの覚悟はできているんだろうな」

「ちょ、ちよつと、豚野郎、何をするつもりですか!？」

理音は性格なのか自分に向けられた殺意に小さく口元を緩ませ始めると美春は男性とは対象的に落ち着いた様子の理音に逆に寒気を感じているようで動けなくなってしまう、

「…………… コロス コロス コロス コロス コロス コロス」

「ん？ そう言えば、空港で引つかかると言っでじじいに没収されたんだったな」

男性が理音に飛びかかろうとした時、理音は懷に手を入れるが取り出そうと思ったものがなかったようで首を傾げると取り出そうとした武器の代わりに理音の拳は男性の腹に深々と突き刺さっている。

第3問

「ぶ、豚野郎、どうして、あの変態の前で普通に動けるんですか！？」

「ん？ 何を言っている。わけのわからん。殺意とか殺気とか言われるものに分類されるものは出てるが、動机的にはただの中年の親父だ」

美春は平然と男性の腹部を殴りつけた理音が信じられないように声をあげるが理音は美春の言い分がわからないように首を傾げながらも男性の攻撃を交わしては反撃を繰り返して行き、

「…………… コロス コロス コロス コロス コロス コロス」

「ほう。まだ、動くか？ タフネスは上昇していると言う事か？」

理音が男性からの敵意を受け始めてから10分が過ぎた頃には男性の動きは壊れた玩具のように鈍くなっているがその殺意は治まる事なくさらに毒々しくなっているが理音に気にする様子はなく、

「まあ、そろそろ、飽きてもきたからな」

「ちょっと、リオ、いつまでも来ないと思ってたら、何をしてるの！？」

理音は男性の相手をするのに飽きたように止めを刺そうとした時、理音と男性を取り囲んでいる野次馬達をかきわけて明久が理音を呼ぶ。

「ん？ アキか？ 相変わらずのバカ面だな」

「その罵倒はいらないからね！！」

理音は自分の名前を呼んだのが幼なじみの明久だと気づいたようで1度、明久に視線を向けた後に彼をバカにすると明久は声をあげると、

「コロス！！」

男性は理音の視線が明久に向かった瞬間を狙ってナイフを投げつけるが、

「攻撃が単調だ。本当に殺したいなら、もっと、頭を使え」

理音は表情を変える事なく投げつけられたナイフを指で挟んで受け止め、

「お前の目的はこれだろ。別に俺はこいつに用はない」

「な、何をするんですか！？ 豚野郎、裏切るつもりですか！？」

「裏切る？ バカな事を言うな。俺はお前とは知り合いでも何でもない。まあ、長い間、座っていたりと身体が固まっていたから、準備運動にはちょうど良かったけどな」

美春の首根っこをつかんで彼女を男性の前に突き出し、美春は助かったと思い始めていた後に地獄に叩き落とされた気分なのか理音を再度、罵倒し始める。

「ふむ。これを引き渡しても効果はなさそうか？」

「こうなったら無駄ですわ！！ 放しなさい。豚野郎！！」

しかし、男性の殺意は未だに上昇を続けており、美春はこの場所から逃げ出したいようで理音を罵倒すると、

「仕方ない。じじいに取られないように隠していたものをここで使うか？ まあ、多少はもつたないが面倒になってきたしな」

「ちょ、ちよつと、リオ、その怪しい注射器は何！？」

理音は面倒になってきたのか懷に手を伸ばすと怪しい色をした液体の入った注射器を取り出し、明久は理音の様子に声をかけるが、

「ん？ 気にするな。未承認だがただの精神安定剤だ。成分的にも血中で無害に変わるようになってる」

「未承認とか、危ない事を言わないで！？ だいたい、血中でって通常時だとどうなるんだよ！！」

「……気にするな。だいたい、承認されてたつて、効果のない抗がん剤を使っている国なんだ。たいしたことではない」

理音は気にする事なく注射器の針を男性の首筋に差し込むと注射器の中の怪しい色をした液体は男性の身体の中に吸い込まれて行き、男性は糸が切れた人形のように膝から崩れ落ちて地面に倒れ込み、

「アキ、こんな状況を以前に体験した事がある気がするんだが」

「し、知らないよ。良いから、逃げるよ」

「ちょ、ちよっと、豚野郎、放しなさい!!」

理音は明久に以前にもこんな状況はなかったかと聞くが明久はそれどころではないと判断したようで美春の首をつかんだままの理音を引っ張って逃げ出す。

第4問

「吉井くん、前田くんは見つかったんですか？」

「う、うん。姫路さん、見つかったんだけど」

明久が理音と美春を人混みから引っぱり出した時、瑞希も明久と一緒に理音を探していたようで明久に駆け寄り、

「ん？ 瑞希か？ ……成長したな」

「ど、どこを見ているんですか！？」

「……………これだから、男は」

理音は駆け寄ってきた瑞希の強調された同年代と比べると育ち過ぎた1部分むねを見て、彼女の成長を確認すると瑞希は顔を真っ赤にして自分の胸を隠すように明久の後ろに隠れ、美春は理音の言葉に舌打ちをする。

「それで、アキ、俺はいつまで捕まえられたままなんだ？」

「あ。ごめん」

「いや、別にかまわんが荷物を取ってこないといけないんだが」

「……………本当にごめん」

理音は美春をつかんでいた手を放すと明久にも手を放すように言い、

明久は慌てて理音から手を放し、理音は人混みの中に置いてきた荷物を取りに戻らないといけないうと人混みに視線を向ける姿に明久は理音から視線を逸らして謝るが、

「いや、気にするな。1度、俺は戻ってくるから、ここで待っていてくれ」

「う、うん」

なぜか、理音の口元は小さく緩んでおり、明久はそんな理音の様子に大きく頷き、理音は人混みの中に突っ込んで行く。

「あ、あの。どうして、前田くんは楽しそうなんですか？」

「いや、ボクにはわからないけど……」

「何ですか？ 豚野郎、美春を見ないでくれませんか？ 気分が悪いですわ！！」

瑞希は理音が人混みに駆け込んで行く姿に首を傾げると明久は美春と一緒に連れてきた事に今、気が付いたようであり、彼女に視線を向けると美春は直ぐに明久を罵倒され、

「ど、どうして、ボクが罵倒されないといけないの！？」

「わ、わかりませんけど、あ、あの、確か、この間、吉井くんのお友達と一緒にしたよね？ どうして、前田くんと一緒にいたんですか？」

「……清水美春ですわ」

明久は自分が美春に罵倒される意味がわからないと声をあげると瑞希は美春とは会った事がある事を思い出したようで理音と何をしていたかと聞くと美春は話をする上で名乗った方が良いと思ったよう
で自分の名前を名乗り、

「ひ、姫路瑞希です。こっちは」

「豚野郎の名前になんか興味はありませんわ」

瑞希は慌てて自分の名前を名乗り、明久を紹介しようとするが美春は明久の名前など知る必要はないと切り捨てる。

「えーと、清水さんはどうして前田くんと一緒にいるんですか？」

「知りませんわ。あの豚野郎が勝手に」

「……人に罪をなすりつけるな。これはお前の関係者だろ」

瑞希は美春の様子に顔を引きつらせながらも、改めて、彼女に理音と一緒にいた理由を聞くが美春は理音に罪をなすりつけようとした時、沈めた男性を引きずった理音が戻ってくると、

「な、なぜ、その変態を連れて帰ってくるのですか!？」

「ん？ さっき、中に戻ったら警察官にこれはお前の父親だから引き取って貰えと渡されてな」

美春は男性を見て逃げようとするがそんな彼女の首根っこを理音は表情をかける事なくつかみ、

「父娘？」

「お父さんを変態と言っのはどうかと思うんですけど」

明久と瑞希は理音と美春の会話に苦笑いを浮かべる。

第5問

「ああ。警察官の話だと名物の変態だそうだ」

「……イヤな名物だね」

「そ、そうですね」

理音は今日のような騒ぎはいつも起きているようだと聞き、少し呆れた口調で簡単に明久と瑞希に説明をすると2人は顔を引きつらせると、

「美春だつて、名物になんかたりたくありませんわ!!」

「俺に言うな。それより、これを引き取れ。俺達には全く関係ないんだからな」

「イヤですわ!!　そこら辺に捨てておいてください」

理音は美春に父親を引き取るように言うが美春は直ぐに拒絶し、

「イヤじゃないだろ。これは変態でもお前の父親だろ」

「これは変態であつて美春の父親ではありませんわ」

理音は美春に『父親』を引き取るようにもう1度、言うが美春は男性を父親だと認めていないようで絶対に受け取る気はなく、2人はにらみ合いを始め出す。

「ね、ねえ。リオも清水さんも落ち着いてよ」

「アキ、ふざけた事を言うな。俺は落ち着いている」

「豚野郎、美春の名前を呼ばないでください。汚らしいですわ!!」

明久は険悪な空気を醸し出し始めた2人の間に割って入ろうとする
が美春に罵倒され、

「話がまったく通じないな」

「よ、吉井くん、落ち込まないでください」

明久は美春から浴びせられる罵倒の連続についに心が折れたようで
道路の片隅でさめざめと泣き始めると理音は眉間にしわを寄せ、瑞
希は明久に駆け寄った時、

「……マイエンジェルトミツメアウダト、ワタシノマイエンジェル
ニイロメヲツカウトコ、キサマノゾウモツヲヒキズリダシテヤル」

「……黙っている」

「黙りなさい。変態!!」

眠っていた人外が目を覚ますが、無情にも立ち上がる前の人外の腹
には理音と美春の共同作業^{けり}が決まり、人外は予想外の攻撃のため、
受け身を取れずに再度、気を失い、

「……なんだかんだ言いながら、リオと清水さんって息が合ってい
るのかな？」

「そ、そうかも知れませんが、良いんでしょうか？」

明久は瑞希に支えられて立ち上がると理音と美春の様子に眉間にしわを寄せ、瑞希は道路に転がっている人外の様子に顔を引きつらせると、

「と、とりあえず、落ち着こう。道路の真ん中でケンカは不味いよ。ひ、姫路さん、清水さんをお願いして良いかな？」

「は、はい。清水さんも前田くんも一先ず、冷静に話し合いをしましょう」

2人はお互いにつかみかかりそうなくらいに険悪になっている理音と美春の間に割って入る。

「勘違いするな。俺は冷静だ」

「だとしても周りに人が集まってきたから、リオも清水さんのお父さんは一先ず、道路の脇に寄せておこうよ。名物なら誰か知り合いが様子を見ていてくれるよ」

「そ、そうですね。一先ずは落ち着いて話をできるところに……あ、あそこの喫茶店はどうですか？」

明久と瑞希は頭を冷やすために喫茶店に入ろうとすぐそばにある『ラ・ペデイス』と言う喫茶店を指差すが、

「あそこはダメですわー!!」

「そうなの？ それなら」

美春は明久と瑞希が指差した喫茶店を却下すると4人は美春の父親を道路の脇に寄せると逃げるようにその場から離れるが理音だけは逃げる理由がないと言いたげな表情をしていた。

第6問

「それで、どうして、こんな状況なんだ？」

「わかりませんわ」

一先ず、4人は近くに喫茶店に入ると理音と美春は状況が理解できないように眉間にしわを寄せるなか、

「……喫茶店に入ったのは良い物の。ここでお金を使つと仕送りまで持たないし」

「……どうしよう。どれも美味しそうだけど、最近、太り気味だし、また、吉井さんと話せるようになったのに嫌われちゃったら、困るし」

明久と瑞希はすでに目的を忘れているのかメニューを見てぶつぶつと呟いている。

「アキ、瑞希、それで、俺をこんなところまで呼び戻してどうするつもりだ？」

「呼び戻してって、おばさんの事、心配じゃないの？」

理音はこのままでは一向に話も進まないと思ったように明久に自分に電話をかけてきた理由を聞くと明久は理音の反応に驚いたようにメニューから視線を理音に変えて聞き返すが、

「心配？ 意味がわからん。だいたい、俺はあの人と縁を切ったん

だ。心配する必要性がない」

「前田くん」

理音はすでに母親になど情はないと言い切り、そんな理音の様子に瑞希は悲しそうに目を伏せると、

「……あの。話が始まったなか、悪いのですが、美春はこの話にまったく関係ないのではないですか？」

「……あれ？ 清水さん、どうしてここにいるの？」

「豚野郎！！ あなたが美春を連れてきたのですわ！！ やってられませんか。美春は帰りますわ！！」

美春もさすがに空気を読んだようであり、自分がここに居ても良いのかと遠慮がちに手をあげ、明久は自分が美春を連れてきた事を忘れていたようで首をかしげ、美春は明久のバカさに彼を罵倒すると喫茶店を出て行ってしまふ。

「……アキ、お前、3年ぶりに会ってもバカだな」

「言わないで！？ そんな哀れんだような目でボクを見ないで！！」

「……逃げるな。話が進まん。それに俺は今日中に日本を出たいんだ。早く用件を言え」

「用件って、おばさんに会う事だろ？」

理音は眉間にしわを寄せると明久は恥ずかしさの限界がきたようで

全力で逃げ出そうとするが理音は明久の首をつかみ、自分呼び出した理由を話すように言うが明久は理音の反応に首を傾げるが、

「意識不明の人間に会ってどうする？ 意味がない」

「で、でも、前田くんが行けば、目を覚ます事とか奇跡が起こるかも知れないじゃないですか？」

理音の口から出る言葉は怜奈と会う気はないと言うだけであり、瑞希は怜奈が目を覚ます奇跡を信じているようであり、

「……無意味だな。俺は科学者だからな。奇跡なんてものは信じないし、奇跡が存在しないと言うのはとうさんが死んだ時にイヤと言うほど思い知らされた。どんなに大切な人のために祈っても神は無情で残酷だ。それに考えても見ろ。俺にはあの人のために神に祈るような心は持ち合わせていない」

「で、でも」

理音はそんな瑞希をバカにするように奇跡など存在しないと言い切り、瑞希は理音の反応に瞳に涙を浮かべると、

「そ、それなら、怜生くんのそばにいてあげてください。おばさんとはすれ違ったままでも、怜生くんにとっては前田くんはお兄ちゃんなんです。怜生くん、おばさんが事故に遭ってから、笑ってくれないんです。ずっと、落ち込んでるみたいで、あの時の前田くんみたいにならずと泣くのをこらえてるみたいで」

「そ、そうだよ。リオ、怜生くんのそばにいてあげてよ。ボクも姫路さんも姫路さんとお母さんもなるべく怜生くんと一緒にいるよう

にしているけど、やっぱり、ボク達じゃ、ダメなんだよ」

明久と瑞希は怜奈の事から話題を怜生に変えた方が良いと判断した
ようで理音に怜生と会って欲しいと願い、

「……怜生か。わかった」

理音は2人の言葉に小さく頷く。

第7問

「……結局、お前は何がしたかったんだ？」

「う、うるさいですわー！」

理音、明久、瑞希の3人は喫茶店を出ると美春は復活した父親に追いかけて回されており、理音は既に美春の父親からは『自分から美春を奪って行く男』認定されているようで理音が視界に入った瞬間に美春の父親は理音に攻撃を仕掛けてくるが理音は直ぐに返討ちに、

「ま、まあ。清水さんも無事で良かったね？」

「そうですね」

明久と瑞希は目の前で繰り広げられる人外対科学者の勝負に顔を引きつらせている。

「それで……美春と言ったか？」

「豚野郎、あなたに名前と呼ばれる筋合いはありませんわー！」

「ん？ そうか。なら、人外娘」

「何ですか。その呼び方はー！」

「そのままだろ」

理音は美春と話をしようとするが2人の間ではまともな会話になり

そうもないが理音は美春の反応を気にしていないようで表情を変える事無く、

「それで、これはどうすれば良いんだ。正直、相手をするのが面倒なんだが」

「リオはマイペースだね」

「そうですね」

理音は白目を向いて地面に転がっている美春の父親をどうするか美春に聞き、理音の様子に明久と瑞希は苦笑いを浮かべると、

「おい。お前が引き取らないなら、他に引き取れる人間に連絡をしろ。母親でも何でもいるだろ」

「そ、そうですね」

理音は美春に父親の引き取り先を探せと言うと美春はそこで初めて気づいたように携帯電話を取り出して家に電話をかけ、

「豚野郎、しばらく、身を隠しますわよ。どこかに案内しなさい」

「……アキ、今更何だが、こいつも同じように沈めても良いと思うか？」

「は、放しなさい。豚野郎！？ ちょ、ちょっと何をするつもりですか！？ み、美春は女の子ですわよ」

美春は父親が目覚めます前にどこかに身を隠そうと理音達に案内を

しろと言つが理音にも限界がきたようであ春の首根つこをつかむと喫茶店の裏にあるゴミ箱に美春を投げ捨てようとする。

「良いか。世の中は男女平等に進んでいるんだ。自分の非を認めないとうなるかお仕置きくらいしても問題ないだろ。お前の変態親父にはお仕置きをしたんだ。おかしな事に巻き込まれた被害者としては反省くらいさせないと納得ができないしな」

「美春は悪くありません！？ ま、待ちなさい。本当にダメですわ！？ わ、わかりましたわ。あ、謝りますから！？ 頭からゴミ箱はダメですわ！？」

理音の行動に声をあげる美春の様子に理音は正当な理由だと言つが美春は反省するそぶりもなく、理音は彼女の頭を躊躇する事無く、ゴミ箱に突っ込もうとすると美春は理音の様子に彼が本気だと理解できたようであ声を上げ、

「あ、あの。前田くん、流石にそれは」

「そ、そうだよ。やりすぎだよ」

明久と瑞希は美春を庇おうとするが、

「アキ、瑞希、しつげがしつかりできていないから、初対面の上に助けてやった人間を豚扱いする人間にそこまで何かをしてやる義理はないぞ。それも口先で謝ろうとするなんてふざけたマネをしているわけだしな。それなら、俺も同じ事をして問題ないだろ。ここでゴミ箱に顔から突っ込まれるか、俺の実験台になるか、素直に自分の非を認めて謝るかの3択で選ばせてやる」

「じ、実験台って何をするつもりですか!？」

理音に聞きいれる気はなく、美春の最後の選択を迫ると美春は聞きなれない言葉に声をあげると、

「できる事なら、いくらでもあるだろ。臨床実験はマウスでのデータがないといけなかったりと面倒な事が多いからな」

「わ、わかりました。あ、謝りますから、ゆ、許してください!？」

理音は邪悪な笑みを浮かべ、美春は彼の様子に背筋が凍るほどの寒さを覚えたようであり、本気で理音に謝る。

第8問

「それで、何で美春、お前が付いてきてるんだ？」

「う、うるさいですわ」

なぜか美春を加えて4人になったメンバーは怜奈の入院している病院に到着すると、

「リオ、こつちだよ」

「ああ」

明久と瑞希は何度も来てくれているようで先を急いで行くが理音はあまり怜奈がどうなるうか知った事ではないため、気だるそうに2人の後を追いかけて、その後ろを美春が付いて歩く。

（……俺が連絡を受けてからだいぶ経つわだからな。もう目を覚ます事はないだろう）

病室に入ると怜奈の体にはいくつかの機械が繋がっており、その近くのイスに怜生がちょこんと座っているのを見つけ、理音は怜奈の様子からすでに彼女が目を覚ます事はないと考えるが怜生は怜奈が目を覚ます事を待っているようで怜奈の顔を覗き込んでいる。

「怜生くん、お母さんは？」

「……トイレに行くって言ってました」

「そうですか」

瑞希は病室を見渡すと怜生と一緒に病室に来ているはずの自分の母親である『姫路瑞穂』がいない事に気づき、怜生に聞くと怜生は瑞穂がいない理由をトイレだと言つと、

「……」

「……何だ？」

怜生は見た事のない人が2人いる事に気づき、理音の顔を見上げ、理音は怜生の反応の意味がわからないように首を傾げる。

「リオ、その反応はないよ。怜生くん、お兄ちゃんだよ」

「……お兄ちゃんですか？」

「ああ。そうなるな」

明久は理音の反応にため息を吐くと怜生に理音が兄である事を教えると怜生は兄がいる事は知っていたようではあるが理音と一緒に住んでいる時は怜生は小さかったため、実感が無いように首を傾げる姿に理音は小さく頷き、

「……兄弟の再会の割にはずいぶんとあっさりしてますわね」

「そ、そうですね」

瑞希は多少、3年ぶりの兄弟の再会は感動的だと思っていたようだが、理音の反応は薄くため息を吐き、瑞希は苦笑いを浮かべる。

「リオ、そんな反応をしてないで、怜生くんとの再会なんだから、抱き締めてあげるとかないの？」

「ん？ そう言うのは必要なのか？」

「……良くわかりません」

明久は理音と怜生の反応にもう少し何かないかと言うと理音と怜生は首を傾げ、

「……何故かはわかりませんが、あの2人が兄弟だと言う事はわかりますわ」

「そ、そうですね」

美春と瑞希は同じ事を思ったようであり、眉間にしわを寄せた時、

「瑞希ちゃんに明久くん？ ……理音くんも？ 帰って来てくれたのね」

「瑞希、妹か？ 俺の記憶には妹がいたと言う記憶がないんだが」

一見、小学生にも見える瑞穂が病室に戻ってきて、理音を見つけて驚きの声をあげるが理音は瑞穂を瑞希の妹だと思ったようである。

「ま、前田くん、私のお母さんです」

「姫路瑞穂です。怜奈さんとは理音くんが海外に行ってから、親しくさせて貰ってたわ。ちなみに前田先生……理音くんのお父さんの

教え子です」

「…………母親？」

「…………なるほど、確かに血は引いてそうだ」

瑞希は理音に瑞穂を紹介すると瑞穂は理音に向かい頭を下げ、瑞穂が瑞希の母親だとは信じられないようで美春は眉間にしわを寄せ、理音は瑞希と瑞穂の胸を見比べて納得したようであり、

「豚野郎！！どこを見ているんですか！！」

美春は理音の反応が何か面白くないようであり、直ぐに理音を罵倒する。

第9問

「……」

「リオ、お医者さんの話はどうだったの？」

理音は怜奈の家族として彼女の症状を聞かされるために、医者に呼び出されていたのだがしばらくすると相変わらずの不機嫌そうな表情をした理音が病室に戻ってくる。

「ん？ そうだな。ここの病院の医者もスタッフも無能だった。才能も腕もないのに傲慢な態度、死んだ方が良いのはここのスタッフだな」

「……リオ、聞きたいのはそこじゃないよ」

理音は医者からの説明の仕方や対応が基準以下だと言いたげであり、理音の言葉に明久達は顔を引きつらせると、

「何、あの説明では必要な情報も足りてないからな。カルテや検査結果等、全てを見せるように言ったんだが、ガキに見せる必要はないと言いだしてな」

「豚野郎、何をするつもりですか？」

「その言葉づかいは止められないのか？」

「いふあい、いふあいです！？」

理音は明久達の言葉など気にする事無く怜奈の隣に立つと今の怜奈の状態からわかる事だけでも確認しておこうと思ったようでカバンから医療道具を取り出して診察を始めようとし、美春は理音が何をするつもりかわからないため、首を傾げると理音は彼女の頬をつねる。

「美春は女の子だと言っているではありませんか!？」

「何度も同じ事を言わせるな。これ以上、同じ事を言わせるとお前にもアキと同等の評価を付けるぞ」

「……わかりましたわ。納得がいきませんがこの男と同じ評価は生物として最低評価を受けたような気がしますから、今日は美春がひきますわ」

「ちょっと、2人ともそれってどう言う事!? 確実にボクの事をバカにしてるよね!？」

美春は理音の自分への扱いがぞんざいのため納得がいかないようで彼を睨みつけるが理音は気にする様子もなく、怜奈の診察を行いながら、美春を『バカ認定』すると言うと美春は明久に視線を送った後にしぶしぶ頷き、明久は2人にバカにされた事を理解したようで声をあげるが、

「……アキ、お前にバカにされてる事に気づく知能があったんだな。今世紀最大の発見だ」

「まったくですわ」

「あるからね!? ボクにだってそれくらいの事はわかるからね」

理音はかなり驚いているようで無表情だった顔が小さく歪み、美春は理音に続くように明久を小バカにすると明久への精神攻撃は思いのほか強烈だったようで明久は床をのた打ち回り、

「アキ、そうやって、瑞希のスカートの中を覗き込むのは止める」

「よ、吉井くん」

「そ、そんな事はしてないからね！？ ひ、姫路さん、ボクは無実だからね！？」

理音は明久への攻撃の手を緩める事無く、瑞希は理音の言葉でスカートを押さえると明久は慌てて弁明しようとするその視線は瑞希の足に固定されており、

「……これだから、男は絶滅した方が良いのですわ」

「おかしな事を言うな。男も女も片方がいなくなったら種が滅びるんだ。お前はあの変態親父のせいで偏見があるようだがもう少し柔軟な考えを持ってみる……」

美春は明久の様子に舌打ちをすると理音は美春が男に嫌悪感を抱いているのがあの父親のせいだとすでに割り切っているようにでも少し彼女に視野を広くするように言々と怜奈の診察に集中し始めたのか言葉はなくなっていく。

第10問

「……」

「豚……吉井、姫路さん、あの男は何をしているんですか？」

美春は理音の素性を知らないためか、理音が何をしているのかわからないようで明久と瑞希に理音が何をしているかと聞くと、

「今更だけど、リオって医師免許って持ってるの？」

「えーと、どうなんでしょう？」

明久と瑞希は理音が研究所で何を専攻しているか知らないようで首を傾げるが、

「理音くんはお医者さんよ。特にお薬とか内科的なものの方が詳しいとは怜奈さんが言っていたけど」

「そうなんですか？」

「うん。怜奈さんは理音くんが載った記事を嬉しそうに集めてたから」

瑞穂は怜奈から理音の話を聞いていたようで理音の経歴を話し、

「え？ ちょっと待ってください。この男は美春達と同じ年くらいじゃないのですか？」

「同じ年だよ。簡単に言えばリオは天才で小学校の卒業と同時に留学しちゃったんだよ」

「この男が天才？ 世も末ですね」

美春は理音の経歴が信じられないようであり、明久は美春が何も知らずにここにいたため、簡単に理音の事を話すがその言葉は美春には信じられないようで眉間にしわを寄せた時、

『て、天才、前田理音？ ちょ、ちよつと待て』

『先生、どうしたんですか？』

怜奈の様子を見にきた医者が理音の素性に気が付いたようで顔を引きつらせて慌てはじめる。

「えーと、何か慌ただしくなってきましたね」

「理音くんの事をただの学生だと思っていたみたいね」

瑞希と瑞穂は医者の様子に苦笑いを浮かべると、

「……やっぱり、触診だけではどうにもならないか？」

「……お兄ちゃん？ お母さんは大丈夫ですか？」

理音は触診だけではどうにもならないかとため息を吐くと怜生は怜奈の事が心配なようで理音の服をつかみ、

「……怜生、覚悟はしておけ」

「ちょっと、リオ!? 怜生くんの前で言う事じゃないよ」

「……現状で言えば、事故後の処置にその後の経過。他にも色々な条件を考えると目を覚ます確率はかなり低い」

理音は医師としての診断なのか全てを割り切った様子で淡々と答えるが明久は理音の言葉に声をあげるが理音は必要な事だと言い切り、

「……お母さん、死んじやうですか?」

「そうだな……」

「……嫌です」

怜生は理音の言葉に今まで抑えつけてきた感情が一気に流れ始めたように瞳からは大粒の涙が流れ始める。

「待ちなさい。豚野郎!?!」

「……何度も同じ事を言わせるな」

美春は理音の対応が小さな子供に言う事ではないため、声を張り上げるが直ぐにまた、理音に頬をつねられ、

「前田くん、本当にダメなんですか?」

「……言っただろ。俺は奇跡なんてものは信じていない」

「リオ、それでもさ」

瑞希は瑞穂から理音が医療従事者だと聞いたためか理音ならどうにかできるのではないかと希望的な事を考えて声をかけるが理音は怜生を抱きかかえ、明久は理音を呼ぶと、

「……仮に希望的に目を覚ますとしようだが、それはいつになるかわからないんだ。それにかかる費用や人間。それを捻出できると思っ
っているのか？」

「それは」

理音は小さく表情を歪ませて無理だと首を横に振った時、

「豚野郎！！何を言ってるのですか！！あなたは天才なんですよ。それくらい、何とかしなさい。常識的だとか言ってるヒマがあるなら、その方法を考えなさい！！」

「……」

美春が理音を罵倒すると理音の口元は美春の言葉に小さく緩む。

第11問

「リオ？」

「簡単に言ってくれるな」

「何ですか？ 天才だと言うならそれくらいやって見せなさい」

明久は理音の表情の変化に気づいたようで理音の名前を呼ぶと理音は抱きかかえた怜生の頭を撫で、美春は理音が天才ならそれくらいやって見せろと言い放つが、

「怜生、俺は神など信じない。それは人の命が神のような奴に終わりを決められるのがムカつくからだ。だから、選べ。お前はお前の母親をどうしたい？ このままでは目を覚ます事はないと言っても良い。それでも、目を覚ます事を願うなら、俺は医の道を志す者として最善を尽くす」

「お兄ちゃんがお母さんを助けてくれるですか？」

理音はぎゃあぎゃああと騒がしい美春を無視して怜生にどうしたいかと聞くと怜生は理音の顔を見上げて彼の服をギュツとつかみ、

「……俺ができるのはこの人が目を覚ます手伝いをするだけだ。目を覚ますのはこの人しだいだ。お前はどうしたい？ 声が届かなくても生きていて欲しいか？」

「……お母さんと一緒に良いです。お兄ちゃんとお母さんと3人で一緒にいたいです」

理音は幼い怜生にはつらい選択を迫っている事はわかっているようだが、怜生にもう1度、聞くと怜生は泣きながら3人で暮らしたいと答える。

「……そうか」

「理音くん、どうするつもりですか？」

理音は怜生の答えに頷くと怜生の頭をもう1度、撫で、瑞穂は理音が何をするつもりなのかと聞くと、

「……一先ずは設備を用意するまでの転院先を探します。このスタッフは無能ですから」

「リオ、それって、おさんの治療はリオがするって事？」

「そうなるな。とりあえずは頼りたくはないが、一時的に預かってくれるところで再検査。問題があるところがあれば手術になるな」

理音はあまり協力を仰ぎたくない人間に頼み事をしないといけないうつで眉間にしわを寄せた時、

『ま、前田先生、先ほどは申し訳ありませんでした。前田先生のお母さまとはいざ知らず、こんな病室ではなく、直ぐに特別室にお運びします』

「ん？」

この病院の院長らしき人物が数名を引きつられ、怜奈を設備の良い

病室に移すと言いだし始めるが、

「気にする必要はない。ここのスタッフは院長を含めて無能だと言う事は理解した。そんなものは必要ない」

「ま、前田くん、そんな事を言っても良いんですか？」

「問題ない。無能なスタッフに体裁を気にするだけの無能な経営者俺がざっとここを見回した限りではここのスタッフは医療従事者でありながら誰一人としてヒポクラテスの誓いなど覚えていないだらうからな。その時点で失格だ。まあ、これに関してはこの国の医療従事者すべてに言える事か。無駄な検査はしたくないから検査データだけを渡せ。俺がお前らに期待するのはそれだけだ」

理音は院長の言葉で確信したようであり、この病院の医者を含めたすべての人間を否定し、

「瑞穂さん、すいません。知りあいに連絡をしてきますので怜生を預かっていただけますか？」

「わかりました」

「ちょ、ちよつと待ちなさい！！」

理音はどこかに連絡するようであり、怜生を瑞穂に預けると病室を出て行き、美春は何かあるのか理音の後を追いかけて行く。

第12問

「……何のようだ？」

理音は電話を終えると自分の後を付いてきた上にこちらをじっと睨みつけている美春に聞くと、

「何で、もう少し、怜生くんに優しい言葉をかけてあげられないのですか？」

「……お前に言われる意味がわからん。それに優しくしてやれるほど、俺はまともな感覚を持ってはいない」

美春は理音が血の繋がった怜生や怜奈に対しての冷たい反応に文句があるようであるが理音はため息を吐く。

「それだけではありませんわ。ここのスタッフに文句ばかり言って機嫌を損ねたらどうするつもりですか？ 何かあったら、怜生くんやあなただって困るんじゃないですか？」

「それはそれだ。だいたい、俺は事実のみを言っているだけだ。これだけ言われて何も感じないならそれこそ、ここのスタッフは終わっている」

「ヒポクラテスの誓いと言っていましたでしたがそれは何なのですか？」

美春は理音の態度の悪さで怜奈への治療が悪くなったらどうするかと聞くが理音はそんな事をするなら、それこそ医療従事者ではないと言い切り、美春は理音が病院スタッフに向かって言ったヒポク

ラテスの誓いと言う聞きなれない言葉を思い出したようで首を傾げると、

「簡単に言えば医者とはこうあるものだと言われているものだ。まあ、お前には関係ない言葉だな」

「医者だと言うなら、もっと医者らしくできないのですか？ もっと優しい言葉をかけてあげるとか」

「……医者は身体を治すのが心を癒すのは俺の仕事ではない」

「あなたは家族でしょ！！ だいたい、あなたはどうしてもそんなに冷静でいられるのですか。母親が死ぬかも知れないですよ！！」

美春は理音の態度が冷たく人間味のない事が気に入らないようであり、理音の胸倉をつかんで叫ぶ。

「……母親？ 悪いな。俺はあの人とは縁を切った人間だ。今更、家族だと言う気はない」

「縁を切った？ 何をふざけた事を言っているんですか？ 家族とはそんなものではありませんわ！！」

「……父親をあそこまで罵倒していた人間が良くそんな事を言えるな」

理音は怜奈とは家族ではないと言い切ると美春は家族とはそんなに簡単なものではないと言い、理音は彼女の手を離させると美春の父親への対応を見ているためか呆れたようなため息を吐き、

「あ、あの変態はまた別ですわ！！　少なくとも怜生くんの様子を見ていればあなたの母親があんな変態とは違う事は誰の目から見ても明らかではないですか。姫路さんのお母さんも言っていたでしょ！！」

「……お前は何か言いたいんだ？　だいたい、俺は治療はすると言っているだろ。家族とかそうじゃないとかは今は関係ないだろ」

美春は瑞穂から怜奈の様子から怜奈の味方をしたいようであり、は自分の父親を世間一般的な家族と一緒にするなと声を張り上げると理音は美春の言いたい事が理解できないようであり、眉間にしわを寄せると、

「俺は戻るぞ。お前との話は俺にとって得るものは何も無さそうだ」

「待ちなさい！！　美春の話はまだ終わっていませんわ！！」

理音は病室に戻ると言って歩き出し、美春は理音を怒鳴りつけながら理音の後を追いかけて行く。

第13問

「……納得がいきませんわ。どうして、母親を置いていなくなれるんですか？」

「えーと、でも、前田くんはお医者さんですし」

「そうだね。お医者さんは患者さん優先だって言うし」

理音は病室に戻ろうとした時に街で事故があつたようで救急車が病院に入ってくると理音は当然のように現場に行つてしまい、3時間が過ぎた頃、美春は怜生と怜奈を置き去りにしていつまでも帰つてこない理音に納得がいかないようで不機嫌そうに言う「と明久と瑞希は美春を落ち着かせようとしており、」

「悪かつたな。その代わり、これを貰ってきたんだ。文句を言うな」

「リオ、お帰り。あのさ」

「何も問題はない」

理音は表情を変える事なく戻ってくると怜奈の検査結果を借りたようであり、明久は理音が手伝った手術が気になったようで遠慮がちに聞くと理音は表情を変える事なく緊急手術は成功したと言うと直ぐに視線を怜奈の検査結果に移し、

「……お兄ちゃん？」

「集中しているみたいですね。怜生くん、お兄ちゃんの邪魔をした

「ダメよ」

「……はい」

怜生は理音の服を引っ張るが理音は怜生に反応する事はなく、瑞穂は怜生を引き寄せる。

「……なるほど、結局は転院は必要か？」

「リオ、何かわかったの？」

「ん？ まあ、少な。さっき、ついでにここの設備も見てきたが必要な設備が足りないから、ここではどうしようもできない」

理音は簡単に検査結果に目を通すといくつか気になる部分があったようであり、検査結果を閉じると、

「一先ずはこれ以上はここに居ても仕方ないな」

「待ちなさい！！　ここまで引っ張っておいて、その答えは何なんですか！！」

「一先ずは日帰りの予定だったから、どこかでホテルを押さえないとけないか」

「え？　リオ、実家に泊まれば良いんじゃないの？」

理音は特に今はやれる事はないと言い切り、美春は理音の様子に理音を怒鳴りつけるが理音は気にする事はなく宿泊先を探そうとし始め、明久は実家に泊まるように言った時、

「美春の話聞きなさい！！」

「お前、いつまでここにいるんだ？」

「何ですか？ その態度は！！」

美春は完全に無視されている事に腹を立てたようであり、理音の胸倉をつかむ。

「前田くん、それはちょっと酷いと思いますよ」

「そうか？ いや、待て。元をたどればこいつは勝手に付いてきただけだろ。本来、関わっては行かないはずの他人の事情に首を突っ込んだのはこいつだ。父親から避難するためとか言うくだらない理由で」

「あれ？ そう言われるとリオは間違っていない気がする」

瑞希は苦笑いを浮かべると理音は美春は本来は怜奈の上質にいるべき人間ではないと言うと明久は理音の言葉に頷きかけ、

「何を言ってるの。美春ちゃんはお友達じゃないの？」

「初対面だな」

「ボクと姫路さんは2度目」

瑞穂は呆れたようにため息を吐くがそこで美春とは親しいわけではないと言い切り、

「そうなの？」

「……そう言われるとどうして美春はここにいるんでしょう？」

瑞穂は理音達の反応に状況を理解できなくなったように眉間にしわを寄せると美春本人も今の状況に違和感を覚えたように眉間にしわを寄せ、

「それより、実際はいつまでもここには居れないんだ。ただ、そばに居れば目を覚ますなら誰も苦勞はしない」

「そうかも知れないわね。そろそろ時間みたいだし」

理音は帰る準備を始めると瑞穂も制限時間が近いと言い、帰る準備を始め出す。

第14問

「……変わらないな」

「リオ、どうかした？」

理音はホテルを借りようと思っていたのだが、明久は理音を彼の家まで引つ張って行き、理音は3年ぶりに見る実家に小さな声でつぶやくと明久は理音の様子に何かあったと思ったようで理音の顔を覗き込むが、

「いや、何もない……しかし、怜生、お前は家のカギを持っているか」

「……はい」

理音は首を横に振ると怜生に家のカギの事を聞くと怜生は首にかけてある家のカギを理音に渡し、

「リオは家のカギを持ってないの？」

「……ずいぶん昔に捨てた。俺には必要のないものだからな」

「リオ……」

明久は理音がカギを持っていない事に首を傾げると理音はすでに家は自分の居場所ではないと言い切り、明久はそんな理音の様子に悲しそつに目を伏せる。

「ん？ 怜生」

「怜生くん、どうかしたの？」

理音は怜生から預かったカギで玄関のドアを開けると怜生は急いで家の中にあがって行き、2人は怜生の様子に首を傾げると怜生はこちらに振り返り、

「……お兄ちゃん、お帰りなさい」

「怜生くん……そうだね。お帰り、リオ」

怜生は理音が捨てた場所と言いつた実家を彼の帰る場所だと言いたいようであり、明久は笑顔を見せると怜生に続くように理音の背中を押して彼を実家に上げると2人は理音の次の言葉を待っているように理音に視線を向け、

「……ただいま。怜生、アキ」

「はい」

理音は2人の言葉に無意識に表情を緩ませると怜生が理音の表情の変化に嬉しそうに笑うと、

「お兄ちゃんの部屋、残ってます。こっちです」

「いや、部屋がのこ……」

「リオ」

「ああ。そうだな」

怜生は家に理音がいる事が嬉しいようではしゃいでいるようであり、理音を部屋に案内するように駆け出して行き、理音は部屋の間所がわかる事を伝えようとするが明久が理音の言葉を遮り、理音は頷くと明久と2人で怜生の後を追いかけて行く。

「ホントにそのまま残してあるんだね」

「みたいだな」

理音と明久は理音の部屋に着くと部屋は理音がこの家を出た当時、そのままであり、怜奈が事故に遭ってから掃除がしていないためか多少、埃がかぶっているが掃除は行き届いているように見え、

「こつやつてみるとボク達も小さかったね。ボクの家のもは買い換えてるものもあるから、さらに実感するよ」

「まあ、そうだな……」

明久は小学生時代のものが多いため、自分達が高校生になった事を実感しているようで苦笑いを浮かべると理音は小さく頷く隣で理音は自分の机の上に置いてある写真立てに手を伸ばすとその写真の中では赤ん坊の怜生を抱きかかえた父親海理と母親、そして、まだ、表情があつた頃の理音が家族4人で写っている写真が入っており、理音の表情は少しだけ悲しそうに歪むが直ぐに表情を戻し、

「一先ず、夕飯をどうするかだな。冷蔵庫の中身も怪しいだろ。先に買い物をしてくるべきだったな」

「そ、そう言えばそうだね」

取りあえずは現状で1番の問題を夕飯と判断したようで冷蔵庫の中身を確認するためにキッチンに向かって歩き出し、怜生と明久は理音の後を追いかけて行く。

第15問

「アキ、お前、色々大丈夫か？」

「……アキお兄ちゃん、無駄遣いはダメです」

「う、うん。気を付けるよ」

結局、キッチンには3人分の夕飯を作るには材料もなく、商店街に戻ってくると明久が生活費まで趣味のゲームやマンガに使っている事を聞き、理音は呆れたようなため息を吐くと明久は肩を落とす。

「『ラ・ペデイス』？ とりあえず、ここで良いか？ 今日はずっとやるが研究所に玲さんが来ていてな。アキがおかしな生活をしていたら連絡をくれと言われていたんだが……」

「ま、待つて！？ 携帯電話を取り出さないで！？ 姉さんに今の生活がバレたら、ボクは社会的信用を失うよ！？」

「アキ、お前に社会的信用があるとは思わないんだが」

「ちょ、ちよつと、リオ、それは酷いよ！？」

理音は夕飯を食べるために適当に喫茶店を決めて入口を開けると、

「な、何しにきたんですか！？」

「ん？ 美春？ バイトか？ ……そう言えば、この店にはくるなと言っていたな」

なぜか喫茶店の中には美春が立っており、理音達の姿を見て驚きの声をあげるが理音は美春がこの喫茶店でバイトをしていると思ったようで1人納得したように頷き、

「まあ、変に怒鳴りつけたりしないでいれば、可愛いじゃないか。その制服を似合ってるしな」

「な、何をいきなり言っんですか!？」

理音は表情を変える事なく、美春の喫茶店の制服姿を誉めると美春は理音の口からそんな言葉が出るとは全く思っていなかったためか不意打ちを喰らって慌てる。

「リオ、よく、そんな風に直ぐに言葉が出てくるね」

「ん？ 思った事を言っただけだ。それより、美春、いつまで待たせているつもりだ。席に案内してくれ」

「わ、わかってま……危ないですわ!？」

「……美春、これを借りるぞ」

明久は理音の様子に苦笑いを浮かべるが理音は気にする様子もなく、美春に席に案内するように言った時、美春は何かに気づき声をあげると理音は美春の手にあったメニューを彼女の手から抜き取るとなぜかこちらに飛んできたナイフをメニューで叩き落とすと、

「ブタヤロウ、ワタシカラマイエンジェルヲウバイニキタノカ？」

「ん？ バイトではなくて実家か？」

ナイフが飛んできた先には人外化した美春の父親が立っており、理音はこの喫茶店が美春の実家だと理解するが、

「リ、リオ、落ち着きすぎだよ！？ ど、どうするんだよ」

「どうすると言われてもな」

「ま、前田、どうかしなさい！！ あの変態なら殺してもかまいませんわー！！」

美春は再び、暴走し始めた父親の様子に声をあげて理音に父親の息の根を止めるように叫ぶ。

「……おとうさん、殺したらダメです。悲しいです」

「れ、怜生くん！？ す、すみません。美春が悪かったですわ！？ な、泣かないでください！？ ま、前田、どんな手段^てを使っても良いですわ。あの変態を殺さずに無力化しなさい！！」

しかし、美春の心ない言葉に怜生は涙目になり、美春は怜生の様子に慌てて方針転換をするが、

「……簡単に言ってくれるな。さっきの薬品も在庫が少ないんだ。多少、荒っぽくなるぞ。店に被害が出るかも知れんぞ」

「かまいませんわー！！ ここの客はなれてますから」

「そうか。なら、こちらからも攻撃させて貰おう」

理音は美春の父親の攻撃を交わしており、武器もないためか小さくため息を吐くと美春は店の被害は気にするなと叫び、その一言に理音の口元は小さく緩み、

「……豚野郎、美春は失敗したのですか？」

「ど、どうかな？」

美春は理音の様子に不安を感じたようで顔を引きつらせ、明久は美春から視線を逸らす。

第16問

「それでは始めよう」

「……なぜ、あの男はこの状況で笑うのですか？」

理音が美春の父親の前で嬉々として笑っている姿に美春は眉間にしわを寄せた瞬間、

「な、何があつたんですか!？」

「ん？ 三半規管を打ち抜いただけだ。人体と言うのは不思議でな。どこにどんなダメージを与えるかで動きをかなり制限する事ができる。もちろん、壊す事もな」

美春の父親はバランスを崩して床に膝を付き、美春は何が起きたのかわからないようで目を白黒させるが理音は平然と言い放ち、

「リオ、何か恐ろしい事を言ってるけど、リオはお医者さんだよね？」

「アキ、良い事を教えてやる。医者は人を治す術も知っているが同じように人を壊す術も知っている」

「リオ、それは危険な発言だからね!？」

明久は理音の言葉に危険なものを感じたようで声をあげる。

「言われなくてもそんな事はわかってる。清水、それでこの変態親

父はどうしたら良いんだ？」

「……その網はどこから取り出したのですか？」

理音は明久に言われるまでもないと言うといつの間にか美春の父親を網でからめ取っており、美春は顔を引きつけるが、

「ん？ 気にするな。悪いな。ちょっと借りるぞ。後はこれで」

「リオ、水とそれはスタンガン？」

「ああ。これで良いだろ」

理音はテーブルにあったコップを手にとると入っていた水を美春の父親にかけ、迷う事無く懐から出したスタンガンの電源を入れて美春の父親に押し付け、美春の父親は理音の攻撃にぐったりとして前のめりに床に倒れ込み、

「美春、席に案内してくれ」

「ええ」

美春の父親を沈めた理音に客から称賛の声が響くなか、理音は気にする事なく美春に席に案内するように言い、美春は顔を引きつらせながら3人をテーブルに案内するように歩きだし、

「怜生、アキ、行くぞ」

「う、うん」

「……はい」

3人は美春の後を付いて行く。

「で、何にするんですか？」

「もう少し選ぶ時間は与えられないのか？　と言っか、どうして席に座るんだ？」

美春は3人をテーブルに案内すると自分もなぜか席に座り、理音は首を傾げるが、

「良いのですわ。だいたい、美春がこの店を手伝う義理はありませんわ。今日はあの変態を店に縛りつけるために居てくれとお母さんに頼まれただけですわ」

「そうか」

美春はやりたくもないのに店を手伝う破目になったため息を吐き、理音はその答え以上に興味はないようで小さく頷き、

「リオ、おばさんの治療はリオがやるって言っただけで、日本に戻ってこれるの？」

「ん？　戻ってこれるではなく、戻ってこないといけないんだ。患者の家族に約束したわけだしな」

明久は理音と美春の様子に苦笑いを浮かべながらも、理音が怜奈の治療をするため日本に残れるのかと聞くと理音は表情を変える事なく患者の家族である怜生のために医者としてやるべき事をすると言

い切り、

「素直じゃありませんわ。助けたいなら助けたいと言えば良いでわないですか。ねえ、怜生くん」

美春は理音が怜奈を母親として見ない事にイラついているようであり、舌打ちをした後、理音の言葉に表情を曇らせる怜生を抱きしめる。

第17問

「リオ、どうして、そんなに冷静でいられるの？」

「ん？ 冷静と言われてもな。慌てて状況が好転するなら、いくらでも慌ててやるがな」

食事を終えた頃に美春の父親は目を覚ますが理音に受けたダメージは身体を動かせるまで回復しておらず、網に絡まったまま、理音へ向けて殺意を向けているが理音は気にする事はなく、食後のコーヒーに口を付けると、

「ねえねえ、美春、結局、この男の子は誰なの？」

「お母さん、わけのわからない事を言っていないで、働いて下さい」

美春の母親らしき女性が理音達が座っているテーブルに顔を出し、美春は大きいため息を吐くが、

「ねえねえ、ウチの美春を貰ってくれない？ あの人を撃退できるのが美春の旦那になる人の絶対条件だから」

「お母さん、何を言ってるんですか！？」

美春の母親は楽しそうに理音に声をかけ、美春は直ぐに母親を怒鳴りつける。

「ん？ 容姿とリアクションは悪くはないがこれが足りないからな」

「どこを触ってるんですか！？ 豚野郎！？」

理音は美春の母親の言葉に表情を変える事なく美春の胸に手を伸ばし、理音の唐突のない行動に美春は顔を真つ赤にして理音を罵倒するが、

「人の事を豚野郎と呼ぶなと何度も言っただが」

「いふあい、いふあい、はなふいなさい！？」

理音は美春の頬をつねると美春は理音を非難するような視線を向けた時、

「リ、リオ、何かまずそうだよ」

「ん？ またか？」

美春の胸を触った理音に向けて美春の父親から先ほどとは比べ物にならないような殺意が立ち上り始め、客からは理音対美春の父親の再戦に盛り上がる声まで聞こえる。

「これは名物になるわね。集客率も上がるかも、美春、しっかりと捕まえておきなさい」

「な、何を言ってるんですか！？ な、何で、美春があんな性格の悪い豚野郎を！？ な、何をするんですか！？」

「何度も言わせるな」

美春の父親の殺意を込めた攻撃を表情を変える事なく交わし続ける

理音の様子に美春の母親は何か考えがあるのか電卓を手に美春に理音を捕まえておけと言い、美春は母親を怒鳴りつけて理音をまたも『豚』と叫ぶと理音からおしぼりが彼女の顔面に飛び、美春までも理音に攻撃を仕掛け始めるが理音は平然と2人の攻撃を交わしており、

「ねえ。なんだかんだ言いながらも良い雰囲気じゃない？」

「そうなのかな？」

美春の母親は理音に喰ってかかっている美春の様子にニヤニヤと笑うが明久は目の前で繰り広げられている人間離れた戦闘に顔を引きつらせた時、

「それで、あんた、これの家族なんだろ。どうにかならないのか？」

「放しなさい!？」

「まあ。私には攻撃してこないから、安心だし」

美春の父親を沈めて美春の首根っこをつかんだ理音が美春の母親に声をかけるが美春の母親は気にした様子はなく、

「それより、さっきも言ったんだけど、美春を貰ってくれない？」

「それは実験台モルモットとしてか？」

「良いわよ。いろんな実験をしても」

理音と美春の母親の話はどこか方向性は合っていないく、

「何を言っているんですか！？ 美春の愛はお姉さまに奉げると決めているのですわ！！」

「こつなのよ。父親の影響か女の子が好きで困ってるのよね」

「なるほどな。それは非生産的だな」

「そうなのよ。このままだと孫の顔も見れないだろうし」

美春は声を張り上げるが美春の声は2人に届く事はない。

第18問

「……リオ、いる？」

「ん？ ああ」

「……」

理音は怜奈を自分の融通が利く病院に転院させると学校を終えた明久が怜生を連れて怜奈の病室に顔を出すと怜生は怜奈の眠るベットに駆け寄り、未だに目を覚ます事のない怜奈の顔を覗き込む。

「おばさんの様子は？」

「ん？ 変わらずだな。とりあえず、やれる事はしたが後は患者しだいだ」

「患者しだいって」

明久は怜奈の様子を聞くと理音はすでにできるだけの処置を済ませたようでは怜奈しだいだと言い切り、明久は冷たく見える理音の様子に不安そうな表情をすると、

「ちょっと、良い？ 怜生くん、廊下にいるからおばさんに何かあったら呼んで」

「はい」

「何だ？ アキ」

明久は何かを決心したようで理音を引っ張って廊下に出て行く。

「何だ？」

「何だ？　じゃないよ。どうして、そんなにおばさんに冷たいんだよ。家族なんだよ」

明久は理音の怜奈に対する冷たい対応が我慢できなくなったようであり、理音の胸倉をつかむが理音の表情は変わる事はなく、

「わかってるんだろ。おばさんがリオを手放した意味もわかってるんだろ。それなのにどうしてそんなに冷たくできるんだよ。おばさんの気持ち、本当にわからないのか！！」

「……アキ、落ち着け」

明久は理音に怜奈が理音を手放した時の気持ちがわからないのかと叫ぶが理音は小さくため息を吐き、明久の手を自分の胸倉から放すと、

「……お前はあの患者の治療するのに医者でなく、俺で向かえと言うのか？」

「へ？　どう言う事？　リオはお医者さんであってリオでしょ」

「……悪いな。脳容量の足りないアキに言っても仕方ない事だな」

「ちょっと、どうしてそこでボクの事をバカにするんだよ！？」

理音は明久に1つの質問を投げかけるが明久は理音の質問の意味がわからずに首をかしげ、理音は明久をバカにする。

「……俺は顔に出ないだけだ。捨てたと思っていたが、あの患者の事で涙を流す怜生の姿を見た時にあの時の自分と重ねた部分がある。とうさんを失う時に何もできなかった自分とな」

「それって、リオもおばさんが心配だつて事だよね。なら」

「……だからこそ、俺は感情を殺す。前田理音個人で動けばどこかに感情が入ってしまい小さなミスをする可能性もある。それを防ぐために俺は医者として患者のあの人を診察する。それ以上も以下もない」

理音は怜奈の顔を心配そうに覗きこんでいる怜生に視線を向けると明久は理音なりに怜奈の事を心配している事が理解できたようだが、理音は淡々とした口調で言い、

「でもさ。家族だから支えられる部分もあるだろ。理音はお医者さんとしておばさんを診察しないといけないのかも知れないけど、リオは怜生くんにとっては不安をぶつけられるただ1人の家族なんだよ。それなのにそんな態度は冷たすぎるよ。まだ、怜生くんが理音の考えを理解できるならまだしも、小さな怜生くんにはそれができるわけがないんだぞ」

「……」

明久は理音の考えを聞いても納得できない部分があるようで理音に怜生の気持ちを考えて欲しいと言った時、

「吉井くん、前田くん、どうかしたんですか？」

「なぜ、こんなところで話をしているのですか？」

「姫路さんに……清水さん？ どうしてここに？」

瑞希となぜか美春まで病室に訪れ、明久は美春が現れた事に首を傾げると、

「うるさいですわ。豚……」

「……うるさいのはお前だ」

「いきなり何をするのですか！？」

美春は明久を罵倒しようとするが理音はどこから出したかわからないがスリッパで彼女の頭を叩き、廊下には小気味が良い音が響く。

第19問

「何度も言わせるな。他人を罵倒するほどお前は偉いのか？ それに院内で叫ぶな。他の患者の迷惑になる」

「ぐぐぐ」

理音は表情を変える事なく、自分に非はないと言い切り、美春は他の患者達のお見舞いにきた人達の視線が自分に集中している事に気づき、拳を握り締めて怒りを抑えると、

「それで何のようだ？ 瑞希はまだしもお前がここに来る必要はないだろ」

「前田くん、その言い方はちょっと」

理音は美春に何しにきたのかと聞くと瑞希は理音の言い方に苦笑いを浮かべ、美春の額には青筋が浮かんでいる。

「ん？ 悪いな。時間だから俺は少し外すぞ。用がないならさっさと帰れ」

「……ム力つきますわ。あの男、いつか、美春の手で八つ裂きにしますわ」

理音は怜奈を受け入れて貰った事もあるためか病院の仕事を手伝っているようであり、3人に用事が終わったら直ぐに帰るように言うとその場を後にし、美春は理音の態度が気に入らないように殺意を込めた視線を理音の背中に向けるが理音は振り返る事はなく、

「それで、姫路さんと清水さんはどうしたの？」

「はい。前田くんはお仕事もしているみたいですし、怜生くんのはにいようと思ひまして」

「あの冷血人間が兄弟だなんて怜生くんがかわいそうですから」

明久は瑞希と美春に病室にきた理由を聞くと2人は怜生の面倒を見るために来てくれたと言い、

「そうなの。とりあえず、中に入ろうか」

「そうですね」

明久は2人を怜奈の病室に招きいれると怜生は理音と明久が廊下に移動した時と変わらずに怜奈の顔を覗き込んでいる。

「……あ、あの。清水さん」

「何ですか？」

瑞希は怜生の隣に座り、明久は美春に声をかけると美春は明久を睨みつけ、

「あ、あのさ。理音は冷血人間ってわけじゃないよ。ちゃんとおばさんの事も怜生くんの事も考えてるよ」

「そんなわけがありませんわ」

「だって、そうじゃないと理音は日本に残らないじゃないか」

「それだって、わかりませんわ。口先だけでこの場に残ったただで、性格が悪いから、研究所とかで干されたに決まっていますわ」

明久は理音とさつき話した事もあるためか、美春が理音を冷血人間だと言った事を撤回したいようで理音は2人の事を考えていると言うが美春は明久を睨みつけて直ぐに明久の言葉を否定すると、

「……お兄ちゃん、優しいです。悪く言わないでください」

「怜生くん、おいで」

明久と美春の話を聞いていた怜生が美春の腕を引っ張り、彼女の顔を見上げて理音は『優しい』と言い、明久は怜生の様子に少しだけ悲しそうに笑うと怜生を呼び寄せ、

「……なぜですか？ 美春にはなぜ、怜生くんがああ男をかばうか理解できませんわ」

「あ。美春ちゃん、ここで話す事ではないんじゃないでしょうか？」

「……それもそうですわね。怜生くんに聞かせる事ではありませんわ。文句はすべてああ男にぶつければいい事ですわ」

美春は怜生が理音をかばっていると思いこんでいるようであり、忌々しそうに吐き捨てると瑞希は苦笑いを浮かべて美春を止めると美春は納得がいかなさそうだが頷く。

第20問

「……実の母親を放っておいて、何をしているのですか？」

「美春か？ 良いところにきた。ガキども俺は忙しいからあいつに遊んで貰え」

美春は明久達と別れてトイレに行っており、怜奈の病室への帰り道で子供の患者にまわりつかれている理音を見つけて眉間にしわを寄せると理音は忙しいようで美春を生贄にすると今まで理音にまわりついていた子供達は美春にまわりつき始め、

「な、なんですか！？ み、美春を売りましたわね」

「……俺は他にも患者を抱えているんだ。ここにだけいるわけにはいかない」

美春は今の状況に驚きの声をあげるが理音は忙しいようで美春を見捨てて歩き出して行き、

『お姉ちゃんは今前田先生の彼女なんですか？』

「ち、違いますわ。何を言い出すのですか！？」

美春は子供達に飲み込まれて行く。

「リオ、お帰り。清水さんを見なかった？」

「ん？ 美春なら今は子供の患者の相手をしてるぞ」

「どうして、そんな状況になったんですか？」

理音は美春を見捨てて怜奈の病室に戻ると明久は美春が病室に戻ってこない事を不思議に思ったように理音に彼女の居場所に心当たりがないかと聞くと理音は表情を変える事なく言い、瑞希は状況に付いていけないように首をかしげ、

「ん。あれでも子供好きと言う事で良いだろ。怜生、少し避けてくれるか」

「……はい」

「あれでもって言葉が気になるんだけど」

理音は怜生に怜奈の横から放れるように言つと定期診断なのか怜奈の診察をはじめ、

「リオ、おばさんはどうなの？」

「アキ、何度も言わせるな。簡単に目を覚ますなら、誰も苦勞はない。現状で言えば意識が回復するかは患者しだいなんだからな」

「あ、あの。前田くん、そう言うのは怜生くんの前では言わない方が」

明久は理音に怜奈の様子を聞くが理音の反応は冷たく、瑞希は怜生の前で話す事ではないと慌てるが、

「怜生には覚悟をしておけと話してある。医者は万能ではないから

な」

「……それはわかってますけど」

理音は怜生に話してあるため、気にかける事ではないと言い切り、瑞希は理音と怜奈をじつと見ている怜生に視線を移す。

「……まあ、特に変化は無いようだな。怜生、俺は勤務時間が終わったから、着替えてくるが今日も時間ぎりぎりまでいるのか？」

「……はい」

「そうか。アキ、瑞希、着替えてくるまで、怜生を見てってくれるか？」

「わかってるよ」

「はい」

理音は怜奈の診察を終えると記録を移すと勤務時間が過ぎたようので着替えをしに病室を出て行こうとすると、

「豚野郎！！ あなたは美春に何か恨みでも！？ い、いふあい、いふあいです！？」

「……何度も同じ事を言わせるなど言っているだろ」

「し、清水さん、お帰り」

「あ、あの。前田くん、それはやり過ぎじゃないかとやっぱり、男

女平等とは言っても男の人の方が腕力が強いわけですし」

病室の入口で美春が子供の患者からようやく解放されたようであげ込んでくるがその言葉づかいに直ぐに理音に頬をつねられ、2人の様子に明久と瑞希は苦笑いを浮かべ、

「ん？　そうか」

「そ、そうですわ」

「なら、ちよつと、霊安室に閉じ込めてくるか、流石に1晩閉じ込めれば反省するだろ」

「ま、待ちなさい！？　そ、それはいくらなんでも無理ですわ！？」

理音は美春を反省させるためだと彼女を霊安室に閉じ込めると言って美春を引きずって行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2751y/>

サドで邪悪な召喚獣 i f ~ Berserker Princess ~

2012年1月5日20時52分発行